

ぐるようになるにつけ、この若君の御在所はいづく、いかゞならせ給ふと心苦しき折も折、最前よりの物語り障子越しに聞くにつけ、見れば見るほど面やつ

させて下さらば、生々世々の御厚恩。コレくく聞き分けてたべ親父様」

れ給へども、紛ひもなき駒若君。ハ、さては思ひ設けず願はずして、ところこそあれ日こそあれ、その

と身をへりくだり詞を崇め、忠義に凝つたる樋口が風情。兼平巴が頭をふまへ木曾に仕へし四天王、

夜一所に泊り合はせ、取換へられて助かり給ふ若君は御運強く、殺されし樋松は樋口が仮の子と呼ばれ、

その随一の武士と世に名を取りしも理なり。

御身代りに立つたるは二心なき某が忠臣の存念。ハ、ア天の冥慮みょうりよに相叶ひ、血を分けぬ子が我が子

となつて、忠義を立てしその嬉しき、なにに類のあ

るべきぞ、御立腹の数々御歎きの段々。申し上げう

様はなけれども、親となり子となり夫婦となるその縁に、つながるゝ定まりごとと思召し諦めて、若君

の御先途を見届け、まだこの上に私が武士道を立て

※演者・時間等の都合により多少の異同がございます。

(一般社団法人 義太夫協会発行)

かなでほんちゅうしんぐら みう

## 仮名手本忠臣蔵 身売りの段

〔解説〕寛延元年(二七四八)八月、竹本座初演。竹田出雲・三好松洛(しょうらく)・並木千柳(なみきせんりゅう)の合作。八月十四日から十一月まで打ち続ける程、当初から人気の高い作品でした。赤穂浪士の仇討ちを扱った数多くの先行作品の集大成であり、「菅原伝授手習鑑」「義経千本桜」と共に三天浄瑠璃の一つに数えられています。元禄十四年(二七〇一)三月十四日、勅使響応の際、江戸城松の廊下で、浅野内匠頭が吉良上野介を刃傷に及んだ事件から、元禄十五年十二月十四日の討入りまでを一年に凝縮し、春夏秋冬に配列したのも心憎い脚色です。時代を足利時代に、場所を鎌倉に置き換え、登場人物も、浅野内匠頭を塩治(えんや)判官、吉良上野介を高師直(もろのお)、大石内蔵助を大星由良助(ゆらのすけ)などと、太平記の世界をとってつけています。

〔身売りの段 あらすじ〕塩治判官の家臣・早野勘平は、殿中刃傷事件の時に主君のもとを離れていたことを悔やんで切腹しようしますが、恋人お軽に止められ、お軽の実家山崎に来ています。お軽の父・与市兵衛は、お軽を祇園の一文字屋に売って勘平の士官資金を得ますが、山崎に戻る途中で、斧定九郎に金を奪われ殺されてしまいます。猟に出ていた勘平が家に帰ると、祇園町から一文字屋がお軽を迎えにきました。舅が一文字屋から借りたという財布の柄が、昨夜の猟の猟の最中に誤って撃った男のものと同じなので、勘平は舅を殺してしまったのかと苦悶します。おかるは別れを惜しんで連れて行かれま

急ぎける。

所も名に負ふ山崎の小百姓、与市兵衛が埴生の住家、今は早野勘平が浪々の身の隠れ里、女房おかるは寝乱れし、髪取り上げんと櫛箱の、暁かけて戻らぬ夫、待つ間もとけし投島田、品よくしやんと結ひ立てしは、在所に惜しき姿なり。

駕籠を昇かせて、急ぎ来るは祇園町の一文字屋。

「エエコウツト、確かこの松の木から、一軒、二軒、

三軒目。オ、こゝぢや、こゝぢや」

と門口から。

「与市兵衛殿内にか」

と言ひつゝ這入れば

「これはマア、遠い処を、ソレ娘煙草盆、お茶あげ

ましや」

と親子して、槌で御家を白人屋の亭主。

「さて、夕べはこれの親父殿もいかい大儀、別条なう戻られましたかな」

「エ、さては親父殿と連れ立つて来はなされませぬか。これはしたり、お前へ往てから今にをいて」

「ヤア戻られぬかエ。テ面妖な。ハハア、もし稲荷前をぶらついてかの玉どんに摘まりやせぬかの。コレ、

この中こゝへ見に来て極めた通り、お娘の年も丸五年切り。給銀は金百両、さらりと手を打つた。がこれの

親父が言はるゝには『今夜中に渡さねばならぬ金あれば、今晚証文を認め、百両の金子お貸しなされて下さ

れ』と涙をこぼしての頼み故、証文の上で半金渡し、残り奉公人と引き換への契約。何がその五十両渡す

との。モ喜んで戴き、ほたほた言ふて戻られたはもう四つでもあらうかい。夜道を一人金持つてゐらぬもの

と留めても聞かず戻られたが、但しは道に」

り。樋口、お筆に打向い

い。娘そこら駆け廻つて若い者大勢呼んで来い」  
と気を急いたり  
「やれ待て女房、人を集むるまでもなし。親父様ス  
リヤどうあつても槌松が敵、この子を存分になさ  
るゝか」

「くどい、くゝわい」

「ハア、ぜひもなし。この上はわが名も語り仔細を  
明した上のこと」

と、若君をお筆に抱かせ上座に直し

「権四郎、頭が高い。天地に轟く鳴雷なるいかずちの如く、御

姿は見ずとも、定めて音にも聞きつらん。これこそ

朝日將軍義仲公の御公達駒若君、かく申す我は樋口

次郎兼光よ」

といふに親子は荒肝とられ、呆れ果てたるばかりな

「さてくゝ女のかいくゝしく、後々までも御先途を見届くる神妙さ、山吹御前も思ひよらぬ御最期。御身が父の隼人もあへなく討死したりとな。力落し思ひやる。それにつけてもかくてある樋口が身の上さぞ不審。若君のためには祖伯父おおおじながら、多田蔵人行家という無道人を誅伐せよとの御意を受け、河内の国へ出陣の跡、鎌倉勢を引受け栗津の一戦。ハ、ア誤りなき御身をやみくゝと御生害遂げ給ひし、わが君の御最期の鬱憤、直ぐに駈け入り、一軍とは存ぜしかど、思へば重き主君の仇。術てだてをもつて範頼義経を討取り、亡君に手向け奉らんと、サこの家に入聲し、逆櫓をいひ立て早や梶原に近付き、義経が乗船の船頭は松右衛門とこと極まる。追付け本意を遂

ど、身も世もあられぬ、よう大それた目に逢はせたなあ。それになんぢや。思ひ諦めて若君を戻して下され。エ、町人でこそあれ孫が敵。首にして戻さうぞ」

と突立上る

「ノウ悲しや」

と取りつくお筆を押し退けはね退け納戸の障子、さつと明くればコハいかに、松右衛門、若君を小脇にかい込み、刀ぼつ込み力士立ち。お筆驚き

「ヤアこな様は、あの樋口の」

「ア、コリヤ、女。ムウム聞えた。最前帰りがけ下の樋の口で、ちらと見た女中よな。若君は身が手に入って気遣ひなし。いふてよければ身が名乗る。ナア合点か。かならず樋の口を樋口などと鈍相いふ

「イエイエ、寄らしやる所は、ノウ母さん」

「ないとも、ないとも。ことに一時も早うそなたやわしに金見せて喜ばさうとて、息せき戻らしやる筈ぢやに、合点がいかぬ」

「アアコレ。合点のいくいかぬはそつちの穿鑿。こつちは下がりの金渡して、奉公人を連れて去の」

と、懐より金取り出だし、跡金の五十両、これで都合百両。

「サア渡す、受取らしやれ」

「お前それでも、親父殿の戻られぬ中は、ノウかる、わが身はやられぬ」

「テぐづぐづと埒の明かぬ。コレ、ぐつともすつとも言はれぬ与市兵衛の印形、証文が物言ふわいの、証文が。今日から金で買ひ切つた体、一日違へば、フン、レコづゝ違ふ。」

まいぞ」

と目ませで知らせば打ちうなづき鎮まる女、聞かぬ祖父

「松右衛門出来したな。さつきにからのもやくや、寝られはせまい聞いたであらう。そちがためにも子の敵。その小死人こしびとづくに切刻んで女子に渡せ」

「イヤさうはいたすまい」

「なぜいたすまい」

「サアそれは」

「それはとは松右衛門、エ、水臭い、水臭いわいやい。云はいても知れた。おのが胤分けぬ槌松が敵ぢやによつていたさぬな。その根性では祖父が儘にもさしやせまい。もう破れかぶれぢや。おれがいふやうにせぬからは親でも子でも何でもな

どうでかうせぎ済むまい、と手を取つて引立つる。

「マアマア待つて」

と取り付く母親、突き退け跳ね退け無体に駕籠へ、押し込み押し込み、鼻きあぐる。

門の口。鉄砲に蓑笠打ち掛け、戻りかゝつて見る勘平、つかつかと内に入り。

「駕籠の中なは女房ども、コリヤマアどこへ」

「オ、勘平殿、よい所へよう戻つて下さつた」

と母の喜び、その意を得ず。

「どうでも深い訳がある。母者人、女房ども、様子聞かう」

とお上の真中、どつかと坐れば、文字の亭主、

「ハ、ア、さてはこなたが奉公人の御亭ぢやの。いやも、たとへ御亭が布袋が大黒が弁天が毘沙門でも、『許婚の夫などと、脇より違乱妨げ申す者これ無く候』と、



しが

「お願ひもうさねば叶はぬ訳あつて、恥を包み面目を凌いで尋ね参りしが、さうお悦びなされては、気がおかれて物がもうされぬ。マア下にゐて下さんせ」と涙ながらに押鎮め

「改めて申すもあぢきなきその夜の騒ぎ。手ばしかう逃げ隠れなされたお前方は巡礼の功德。此方は一人は病人なり、男としてはあるに甲斐なき年寄。逃ぐるも隠れるも心に任せず。取違へたそのお子はその夜にあへなくなり給ふ」

と聞いてびっくり

「とは何故に」

「とはいかに」

とあまりのことに泣きもせず、仰天すること道理な

れ。

祖父は声こそ立てねども、涙を老に嚙みませて、のどにつまればむせ返り、身も浮くやうに泣きければ、娘は心も乱るゝばかり、空しき笈摺手に取つて

「やれ槌松よ、かゝなるは。夕べの夢にまぎ／＼と、前の父さんに抱かれて天王寺参りしやると見たは、日こそ多けれ父御の三年の祥月なり。命日のけふの日に便り聞く告げでこそありつらん。それとは知らぬ凡夫の浅ましき。今日は連れて来るか明日は戻りやるかと待つてばかりあたものを、大きな災難に逢ふて笈摺に書いた詮もない、これがなんの二世安樂。巡礼も当てにはならぬ、観音様も腑甲斐ない。恨めしや懐かしや、あわれこのことが夢であつてくれかし」

と、俺が着てゐる、かう、かうかう、この単物の縞の切れで拵へた金財布貸したれば、やんがて首にかけて戻られう」

「ヤアなんと、こなたが着てゐるこの縞の切れの、金財布か」

「オ、てや」

「あの、この縞でや」

「なんと、慥かな証拠であらうがな」

と、聞くより『ハッ』と勘平が肝先にひしと堪へ、傍辺りに目を配り、袂の財布見合はせば、寸分違はぬ糸入り縞。『南無三宝』さては夕べ鉄砲で撃ち殺したは兇であつたか、ハア、ハッ』と、我が胸板を二つ玉で撃ち抜かるゝより切なき思ひ。とは知らずして女房。

「コレこちの人、そはそはせずと、遣るものか遣らぬものか、分別して下さんせ」

「ム成程。ハテもうあの様に慥かに言はるゝからは、行きやらずばなるまいかい」

「アノ父つさんに逢はいでもかえ」

「ア、イヤ、親父殿にも、今朝ちよつと逢うた、が戻りは知れまい」

「フウ、そんなりや父つさんに逢ふてかえ。それならさうと言ひもせで、母さんにもわしにも案じさしてばつかり」

と言ふに文字も図に乗つて、  
「ソレお見いなどうどすえ。七度尋ねて人を疑へぢや。親父の在り所も知れたので、そつちもこつちも心が良い。まだこの上にも四の五のあれば、いやとみにでんど沙汰。アアママさらりと済んでめでたい、めでたい、アハ、ハ、ハ、ハ。ヤコレお袋も御亭も六条参りしてちと寄らしやれ。サ、サアサアお娘、駕籠に乗りや、早う

駕籠に乗りやいのう」

「アイ、アイ。これ勘平殿、もう今あつちへ行くぞえ。年寄つた二人の親達、どうでござんさんのみんな世話。取り分けて父つさんはきつい持病。気を付けて下さるせ」

と、親の死に目を露知らず、頼む不便さいぢらしさ。

『いつそ打ち明けありのまゝ、話さんにも他人あり』

と、心を痛め堪へ居る。

「オ、婿殿、夫婦の別れ暇乞がしたかろけれど、そなたに未練な気も出よかと思ふての事であらう」

「イエイエ、なんぼ別れても、主のために身を売れば、

悲しうもなんともない。わしや勇んで行く。母さん、

したが父つさんに逢はずに行くのが」

「オ、それも戻らしやつたらつひ逢ひに行かしやろぞいの。煩はぬ様に灸据ゑて、息災な顔見せに来てた

「道理で見たような顔ぢやと思ふたこと。これは夢

か現かいゝナウ。およし悦べ、榎松を取違へた人ぢ

やとやい。此方からも行方を尋ねて、もとゝへ取

戻す筈なれども、なにを証拠に尋ねて行かう手掛り

もなく、泣いてばつかり居りました。その代りには

取違へたそつちの子供衆。鬼の毛で突いたほども怪

我させず、虫腹一度痛ませず、マ、娘が乳が沢山な

ゆゑ、喰物はあしらひばかりマ乳一度あまさせず、

ヲ、それよ。風邪一度ひかさばこそ。親子が大事に

かけたにつけても、此方の息子めもさぞ御厄介。お

世話であらう。よう連れて来て下さつた。忝い、

ハ、ハ、ハ、忝い、ハ、ハ、ハ。忝いゝマ忝いわい

やいハ、ハ、ハ。わるさよ。わがうちを忘れたかい。

なぜ入らぬぞ」

も、ヤア」

「アイ」「ヤア」「アイ」「ヤアヤアヤア」「アイナア」

「鼻紙、扇もなけりや不自由な。なんにもよいか。ソ

レとばつて怪我しやんな」

と、駕籠に乗るまで心を付け、

「さらばや」

「さらば」

『なんの因果で人並な娘を持ち、この悲しい目を見る事ぢや』と、齒を食いしばり泣きければ、娘は駕籠にしがみつき、泣くを知らさじ聞かさじと、声をも立てず咽せ返る。情なくも駕籠昇き上げ、道を

「ア、イヤ門に、ではござんせぬ」

「エ、ハ、ハ、ハ、連れの衆が後から連れてお出でなさ

るゝか。さぞ御厄介。忝いハ、ハ、ハ、忝い、

ハ、ハ、ハ、ハ、忝いゝマ忝いわいやいハ、ハ、ハ、ハ。

テはやう逢ひたいな。娘チャットお札を申しやいの」

「アモ父様せはしない。このお札がちやつきりちや

つとつひいふて済むことかいなア。もうしこの榎松

はなぜ遅い。お連れの衆が門違へはなされぬか」

「この榎松はなぜ遅い」

「マわが子はいかに」

「孫はいかに」

と立ち代り入り代り、門を覗いつ礼いひつ。そゞろに悦ぶ親子の風情。お筆が胸に焼金さす、今さらなんと返答も、泣くも泣かれず差俯き暫く詞もなかり

光を添へぬらん

妻恋ふ鹿の果てならで、難儀硯の海山と、苦勞する墨憂きことを数書くお筆が身の行方、いつまではてし難波瀉。福島に来てこと問へば、門に印のそんじよそこと、松を目当てに尋ね寄り

「ハア御免なりましよ。松右衛門様はこなたか。お名を知るべにはるぐ尋ね参った者。お逢ひなされて下さったら、忝うござんしよ」

と物腰のしとやかさ

「アレ父様。松右衛門殿に逢ひたいと女子が来た。

碌なことではあるまい」

と跡先知らで女気の、はや愠気する詞の端

「エ、興がる、嗜めくく」。松右衛門に逢ふて姉

ぢやといふても愠気するか。それほど氣遣ひなら呼

び込んで、逢はせぬ先に聞いたがよいわい。ア、どなたじゃ、女中、どこからござった。松右衛門うち

に居まする、遠慮せずととつと入らしやれ」

「それはまあくお嬉しや」

と笠解き捨てうちに入り

「お前が松右衛門様か、お近付きでなければお顔見知らうやうはなけれども」

「なけれどもなりや、なぜござった」

「ム、サアもうし、なにが知るべにならうやら。撰

州福島松右衛門子、槌松と書いた笈摺おいずるが縁になつ

て」

「ヤアそんならこなたは大津の八丁で、また後の月

二十八日の夜の」

「アイお子様を取違へた者でござんす」

いちのたにふたばぐんき

くみうち

## 一谷嫩軍記 組討の段

〔解説〕宝暦元年（一七五二）十二月、豊竹座初演。並木宗輔（千柳）・浅田一鳥・浪岡鯨兒（なみおかげいじ）・並木正三らの合作。「平家物語」「源平盛衰記」を基に、敦盛（あつもり）最期と忠度（ただのり）都落を中心に脚色したもの。三段目までは並木宗輔が書いたものの、この段が絶筆となり、その後は一鳥らが完成させました。

〔二幕までのあらすじ〕源義経は、家臣、熊谷次郎直実に弁慶筆の「一杖を切らば一指を切るべし」と書かれた制札（立て札）を渡し、熊谷は我が子小次郎と共に出陣します。一谷の合戦では、小次郎と平山武者所が先陣争いをするように斬りこんでゆき、後から駆けつけた熊谷は、負傷した小次郎を陣屋（軍兵の詰め所）へ連れ帰ります。その後、平家の陣内から大将敦盛が現れ、逃げる平山を追って行きます。その頃、敦盛の許嫁玉織姫（たまおりひめ）は敦盛の姿を求めて須磨浦をさまよっていました。そこへかねてから姫に横恋慕する平山が近付き、我が意に従わせようしますが、靡かぬのに腹を立てて、姫を刀で刺してしまいます。

〔組討の段〕敦盛は平山を見失い、ひとまず沖の味方の船へ戻るため、馬を泳がせますが、熊谷が勝負を挑んで呼び止めます。二人は馬上で打ち合い、互いに馬から落ちた時、熊谷が敦盛を組み敷きます。熊谷が敦盛に、思い残すことがあるならかなえてやろうと言うと、敦盛は自分の死骸を父に届けて欲しいとだけ頼みます。健気な振る舞いに心打たれた熊谷は、敦盛を逃がそうとしますが、それを平山に責めたてられ、進退極まってついに首を討ち落とします。そこへ瀕死の玉織姫が這い寄り、見えぬ目で敦盛の首と名残を惜しみつつ息絶えます。熊谷は無情を悟り、敦盛の首を抱いて帰路につくのでした。

去る程に、御船みふねを始めて、一門皆々船に浮かめば  
乗り後れじと、汀みぎわに打寄れば、御座船ござふねも兵船も、遙  
かにのび給ふ。無官の太夫敦盛は道にて敵を見失ひ、  
御座船に馳着いて、父経盛に身の上を告げ知らすこ  
とありと、須磨の磯辺へ出でられしが、船一艘もあ  
らざれば詮方せんかた波に駒を乗入れ、沖の方へぞ打たせ給  
ふ。かゝりけるところに後より、熊谷次郎直実。

「ヲ、イ〜」

と声をかけ駒を早めて追っかけ来り、

「ヤアそれへ打たせ給ふは平家の大将軍と見奉る。

正ただなうも敵にうしろを見せ給ふか引返して勝負あれ。

かく申す某は、武蔵ノ国の住人熊谷次郎直実見参せ  
ん返させ給へ」

と、扇を上げて指招き、

「暫し〜」

と呼ばはったり。敵に声をかけられて何か猶予のあ  
るべきぞ、敦盛駒を引返せば、熊谷も進み寄り、互ひ  
に打物抜きかざし、朝日に輝くつるぎ剣の稲妻かけ寄り、  
かけ寄せちやう〜、蝶の羽がへし諸もろ鎧、駒の  
足並かつしかつし。かしこは須磨の浦風に鎧の袖は  
ひら〜。群れある千鳥村千鳥むら〜ぱつと、  
引込に、寄せては返り、返りては又打ちかくる虚々  
実々。勝負も果てしあらざれば、

「いそふれ組まん」

と敦盛は打物からりと投げ給へば、

「コハしほらし」

と熊谷も太刀投げ捨て、駒を寄せ、馬上ながらむす  
と組み

「えい」

「えい」

せいすいき まつえもんうち

## ひらかな盛衰記 松右衛門内の段

### 〔解説〕

元文四年（一七三九）大坂竹本座初演。文耕堂・三好松洛ら五人の合作による五段の時代物浄瑠璃。外題の「盛衰記」は『源平盛衰記』を指し、源義仲が滅亡する粟津の戦いから一ノ谷合戦までの間の『平家物語』の世界を描いています。女流ではほとんど語られない演目で、昭和四十三年四月の本牧亭公演以来、五十五年ぶりの上演です。

### 〔松右衛門内の段 あらすじ〕

義仲の御台山吹御前と若君駒若丸は、老臣鎌田隼人とその娘腰元お筆に守られて落ち延びますが、大津の宿屋で追っ手がかかり、暗闇のなかで、同宿の船頭権四郎の孫槌松が駒若に間違えられて討たれ、山吹と隼人も死んでしまいます。権四郎の娘およしへ婿入りしていた船頭松右衛門とは、実は義仲の家臣である樋口次郎兼光で、舅が孫と取り違えて駒若を連れ帰ったことから、偶然にも若君を守ることとなります。お筆が松右衛門宅を訪れ、孫の死を知った権四郎は悲憤しますが、樋口の真情込めた説得で納得します。

と耳を引くやら、脇明けより手を指し入れてこそぐ  
るやら。つめりつ、叩いつ、突倒し

「サア／＼これで姫様の愷気の名代納った。いよいよめでたい御祝言、三国一ぢや。髯を取り済ました。しゃん／＼、しゃんと済んだ」

と打ち笑ひ、局々へ入る跡は、前後正体泣き倒れ、暫し消え入り居たりしが

「エ、胴慾ぢや／＼胴慾ぢやわいのう。男は取られその上にまたこの様に恥かゝされ、何と堪えて居られうぞ。思へば／＼つれない男。憎いはこの家の女めに見かへられたが口惜しい」

と袖も袂も喰い裂き／＼、乱れ心の乱れ髪。口に喰ひしめ身を震はせ

「えい」

の声の内、互ひに鎧を踏みはづし両馬が間にどうど落つ。すはやと見る間に熊谷は敦盛を取つて押へ、

「かく御運の極る上は、御名を名乗り直実が高名譽を顕はし給へ。又今生こんじょうに何事にも思ひ残す御事あらば、必ず達し参らせん。仰せおかれ候へ」と懇ねんじろに申すにぞ。敦盛御声爽かに、

「フ、やさしき志。敵ながらあつぱれ勇士、かく情ある武士の手にかゝり死せんこと生前しやうぜんの面目。戦場に赴くより、家を忘れ身を忘れ、かねてなき身と知るゆゑに、思ひおくこと、更になし。さりながら忘れがたきは父母の御恩。我討たれしと聞き給はゞ、さぞ御歎き思ひやる。せめて心を慰むため、討たれし跡にて我が死骸、必ず父へ送り給はれかし、我こそ参議経盛の末子ぼっし、無官の太夫敦盛」

「エ、妬ましや、腹立ちや、おのれおめ／＼寝ささうか」

と姿心もあら／＼しく駆け行く向ふに、以前の使者「オ、そなたも邪魔しに出たのぢやな、もうかうなつたら誰が出て構はぬ／＼。そこ退きや」

と袖すり抜けてかき入る裾、しつかと踏まへ「コリヤ待て女」

「イヤ待たぬ、ここ放しや／＼」

と身をもがく。たぶさつかんで氷の刃、脇腹ぐつと差し通せば、『うん』とのつげに倒れ伏す。刀つき捨て辺りを窺ひ、目を配る。奥は豊かに音楽の、調子も秋の哀れなり。

と、名乗り給ひしいたはしき。木石ならぬ熊谷も見ると、名乗りにくけれど、何思ひけん引起し鎧の塵を打払ひ／＼、

「この君一人助けしとて勝軍に負けませまじ、折節外に人もなし。一先づこゝを落ち給へ。早う／＼」といひ捨て、立別れんとするところに、後の山より武者所数多あまたの軍兵。

「ヤア／＼熊谷。平家方の大将を組敷きながら助くるは二心に紛れなし。きやつめ共に遁すな」

と声々に罵るにぞ、熊谷ははつとばかり、『いかゞはせん』と黙然もくねんたり。敦盛卿しとやかに、

「とても遁れぬ平家の運命。こゝを助かり行先にて下司下郎の手にかゝり、死に恥を見せんより早く御身が手にかけて、人の疑ひはらされよ」

と、西に向かひて手を合はせ、御目を閉ぢて待ち給

へば、いたはしながら熊谷は御後ろに立ち廻り、弥陀の利剣と心に唱名、ふり上げは上げながら、玉の様なる御粧ひ。『情なや無慚や』と、胸も張り裂く氣後れに、太刀ふり上げし手も弱り、思ひにかきくれ討ちかねて、歎きに時も移るにぞ、

「ア、後れしか熊谷。早々首を討たれよ」

と、捻ぢ向き給ふ御顔を見るに目もくれ心消え

「倅小次郎直家と申す者丁度君の年恰好。今朝軍の先駆けして薄手少々負うたる故、陣屋に残し置きたるさへ心にかかるは親子の仲。それを思へば今こゝで討ち奉らば、嘸や御父経盛卿の、歎きを思ひ過ごされて」

と、さしにも猛き武士も、そゞろ涙にくれぬたる。

「ア、愚かや直実、悪人の友を捨て、善人の敵を招

けとはこの事。早首討つてなき後の回向を頼む、さもなくば生害せん」

とすゝめられ、

「ア、是非なし」

とつつ立上り

「順縁逆縁俱に菩提、未来は必ず一蓮託生」

「南無阿弥陀仏」

「南無阿弥陀仏」

首は前にぞ落ちにけり。袈をほどいて敦盛の御死骸を押包み、総角取つて引き結び、手綱を手繰り結び付ける。鞍の塩手やしをしをと。弓手に御首携へて、右に轡の哀れげに、檀特山のうき別れ、悉陀太子を送りたる、車懸童子が悲しみも、同じ思ひの片手綱、涙ながらに（引て行。）

とこの様に申しまする」

と打ち伏せば、皆々一度に手を打つて

「さてもきつい嗜み事。よい慰みで我々が、ほてつ

腹までよれました。馬士殿大儀」

と言ひ捨て、行くを、驚き

「コレ申し、私も共に」

と取り縋れど、ふり離されてがばとこけ、寝ながら

裾にしがみ付き、引きずられて、声を上げ

「なう皆さん、お情ない。どうぞ私も御一緒に連れてござつて下さりませ。お慈悲、く」

と手を合はせ、拝み廻るを叩きのけ

「オ、しつこ、とても及ばぬ恋争ひ。お姫様と張り合ふとは、叶はぬ事ぢや、置いてたも、大胆女の躰をせう」

と引き出され

「もなりませぬ。帰りや」

され。早うその婿様に」

「サア賀様が見たくば早う謡や。馬子の唄なら面白からう。ついでに振りも立ってしや。嫌ならこつち

「サアくくく何の嫌と申しませう」

「サそんなら謡や」

「アイく謡ひまする」

と泣くくも、涙に絞る振り袖は、鞭よ、手綱よ、立ち上り

「竹にサ、雀はナ、品よくとまるナ、とめてサとまらぬナ、色の道かいなア、ヨ、エ、こゝなほてつ腹め、

お座敷拜むという事は、女の身では手柄者。したが  
こちらが呑み込んでお座敷へは出すものゝ何ぞさゝ  
ずばなるまいに、何と皆さん、いつそのことこの者  
に酌取らそではあるまいか」

「よからう〜」

「ア、申し、その酌とやらは」

「フ、何のまたそち達が知つてよいものか。今こゝ  
で教へてやる。幸ひこゝに御酒宴の銚子島台。あり  
合ひの婿君様には紅葉の局。梅の局は嫁君役。残り  
は介添え待ち女郎」

と桜の局が指図して、嫌がるお三輪に、長柄の銚子  
持たせ、持ち添へ

「マア盃は三つ重ね。嫁君へ二度ついで、左へ二足。

コレ立つのぢやわいの〜。エ、何ぢやいの。うか

〜せずとよう覚や。三度目ついで婿君へ。コレ酒  
がこぼれるわいのう。不調法な。サこれからが乱酒  
謡ひ物。これも嗜みなければならぬ。サア四海波なしかいなみ  
と謡やいの」

「エ、」

「エ、とは嫌か。そんなら婿様拜ます事はマアなら  
ぬ。サそれが嫌なら早う謡や」

とせつき立てられ

「これがマア何と千秋万歳の」

千箱ちはこの玉の血の涙声詰らせて泣いじやくり

「フ、めでたう哀れに出来ました。色直しにはんな  
りと、梅が枝でも露組でもサア〜聞きたい。所望  
ぢや〜」

「エ、あられもない事おつしやりませ。山家育ちの

いもせやまおんなていきん きんでん

## 妹背山婦女庭訓 金殿の段

〔解説〕明和八年（一七七二）大坂竹本座初演。近松半二らの合作で、全五段の時代物。当時衰退していた竹本座がこの作品  
の大大にりにより盛り返したと言われるほど、人気のあつた作品です。物語は藤原鎌足親子による蘇我入鹿討伐を題材に、  
大和地方の伝説や謡曲、幸若舞曲などを取り入れ複雑な構成の大作となっています。

天智天皇の御代、蘇我入鹿は天皇派の藤原鎌足を失脚させ、自ら帝位につきます。入鹿は母が白い牝鹿の生血を飲んで生  
まれた為、超人的な能力を持っていましたが、爪黒の鹿の血と嫉妬に狂った女の血を混ぜ鹿笛に注いで吹くと、その力が失  
われるという宿命でもあり、ついにはその弱点を突かれて討伐されるのでした。

〔あらすじ〕三輪の杉酒屋の娘お三輪は、烏帽子折の求馬（もとめ）「実は鎌足の子、淡海」に想いを寄せますが、求馬のも  
とに恋人橘姫が尋ねて来ます。求馬は、姫の後を追つて三笠山の御殿にたどり着き、橘姫が入鹿の妹であることを知ります。  
求馬を追つてきたお三輪は、入鹿の御殿に入り込みます。求馬と橘姫の婚礼が行われると聞き嫉妬に駆られたお三輪は、女  
中たちにもいたづられ益々逆上します。そのお三輪を漁師鱸七（ふかしち）に姿を変えて御殿に入り込んでいた鎌足家臣金輪  
五郎が刺し、入鹿を討つには嫉妬に狂った女の血が必要であり、お三輪のその血が愛しい求馬の役に立つことを言い聞かせ  
ます。お三輪は来世で求馬と添うことを願いながら息絶えるのでした。

れてぞ忍ばるゝ

迷ひはぐれしかた鶉、草の靡くを導べにて、いきせきお三輪は走り入り

「エ、この苧環の糸めが切れくさつたばつかりで、道からとんと見失うた。さりながらこゝより外に家はなし。大方この内へ入ったに違ひはない。エ、誰れぞ来よかし。問ひたや」

と見やる先より、お端女が被まぶかに、しやな／＼と豆腐箱提げ歩み来る

「申し／＼」

と呼びかくれば、オット呑み込む早合点

「オ、お清所尋ねるなら、そこをこちらへかう廻つて、そつちやの方をあちらへ取り、あちらの方をそちらへ取り、右の方へ入つて、左の方を真直ぐに脇

ほんに油断も隙もなるこつちやない。大それた人の男を盗みくさつて、何ぢやいしこらしい内祝言ぢや。余りな踏み付けやう。よい／＼。その代りどこに居ようと尋ね出し、求馬様と手を引いてこれ見よがしにいで退けるが腹いせぢや」

と行かんとせしが

「イヤ／＼はしたない者ぢやとひよつと愛想をつかされたら、とやうてこのまゝに見捨てゝこれがどう往なれう。エ、どうせうぞ」

と心も空、登る階長廊下。行き交ふ女中が見咎めて、一人が留むれば二人立ち、三人四人いつの間に、友呼ぶ千鳥むら／＼と、こゝかしこから寄りたかり

「ついで見馴れぬ女子ぢやが、そなたはマア誰ぢや。何者ぢや」

目もふらずめつたやたらにずゝゝと行きや」

「イエ／＼私が尋ねるのは、そのお清殿とやらではござんせぬ。年の頃は二十三四で色白にくつきりとした好い男は参りませなんだかえ」

「ヲ／＼、来たげな／＼。それはお姫様の恋男ぢやげなの。三輪の里から跡追うて来たところを、何がお局達が引つ捕へ、有無を言はせず御寝所へ、ぐつと押し込み上から蒲団をかぶせかけ／＼、ア、／＼宵の中内証の御祝言がある筈と、暮れぬ内から騒いでぢや。エ、けなり、こちとまで内太股がぶき／＼と、卯月あたりの弾け豆。豆腐の御用が急ぐに」

と喋り廻つて、出でて行く

「サア／＼ひよんなことが出来てきた。ほんに「ハイ、ハイ／＼、私は内方の、オ、それよ、さつきのお清殿は寺友達、奉公に出られてから久しう逢はぬなつかしさ。ちよつと見舞ひに寄りましたら、これはマア／＼よう来た。上がれ、茶々呑め、さうして煙草呑め、アノお上にはあた滅相な御祝言があると聞けば聞くほど涙がこぼれて、あたおめでたい事ぢやげな、ほんに内方の様なよい衆の御祝言はどの様なものぢやおのれやれ拜んでなり、腹癒よと、うかうかこゝまで参りました。どうぞお前方のお心でする」

と言ふ顔も恨み色なる紫の、ゆかりの女とはや悟り、『なぶつてやろ』と目引き、袖引き

「マア／＼そちは仕合せな。かういう折に参り合ひ、